

マルクス経済学における

プランの二問題点

——平瀬氏の「経済学の古典と近代」によせて——

熊谷 一 男

マルクスが「経済学批判序説」に於て示した経済学の篇別構成

のどれだけの部分を、現行「資本論」が占めるかについては、所謂プランの問題として今日まで多くの論議を起してきた。現行「資本論」がプランの「資本一般」の範囲に止まるか夫とも夫以上を含むのか、又資本論の著作過程中にプランの変更が行われたのではないか、と云う点をプランについてのマルクスの諸立言から論証する試みが行われたのであるが、この問題は又現実の要請でもあった。今日は独占の高度に発展した段階であり、独占価格・独占資本・経済活動に於いて国家の占める大きな役割は、価値の段階の分析に止まった現行「資本論」の領域をのりこえて、プランの諸領域の体系化を要請するに至っている。

「経済学の古典と近代」に於て、平瀬氏は現行「資本論」の体系が「資本一般」の体系であり、従って現実的競争・本来的独占価格は彼岸の領域であることを再三強調されている。元来現行「資本論」の体系を「資本一般」の体系と解する見解は、古く久留間氏に依り主張され今日多くの人々の間で支持されている。がしかし私見に依れば、従来この種の主張は単に問題提起の段階を出でず、進んで「資本論」の論理自体の中から論証し、且つ彼岸の領域を確立する試みが余りなされなかった様に思われる。

氏も又「問題は片言隻句にあるのでなくて、われわれのまゝに厳存する現行「資本論」体系の論理構造自体の分析にある」(六頁)とされ、現行「資本論」体系の論理構造自体から証明することを本書が果すたろうとしている。事実本書に於て氏は先づ第一に経済学における古典と近代を平均原理と限界原理に依り区分し、この類型化したがつてマルクスを古典経済学の共同才線に包摂せしめ、この上に立つて第二にマルクスの「資本一般」の論理を

平均利潤の体系と解し、従って現実的競争・本来的独占価格を彼岸の問題だとし理論的基礎づけを行う。つまり、氏独自の経済学の類型化の上に立って本来的独占価格の理論的基礎づけを行うことが本著の主題をなしている。

この主題がどれだけ果されているか。氏の良き意図に反して本著も又「資本論」の論理構造自体から現行「資本論」 \parallel 「資本一般」が、従ってその彼岸としての現実的競争が、論証されていない様に思われる。

二

氏は平均原理を体系構造の主軸とする一切の経済学を古典経済学と規定し、マルクス現行「資本論」体系をもこれに包摂せしめる。他方限界原理を体系構造の主軸とする一切の経済学を近代経済学と規定し、ここに古典と近代の類型化を見出している。そしてマルクスの「資本一般」の論理は、(一)労働価値説、(二)価値 \parallel 価格一致の理論、(三)実物的接近の論理、(四)完全競争の論理を筋骨体系としてその上に構築されているから、これは同じく(一)、(二)、(三)、(四)を筋骨体系とし、価値数量説、C無視に関するスミスのV+mのドグマを脈管体系として、その上に構築される平均利潤の体系としての古典経済学と一致すると云うのである。

従って現行「資本論」体系における競争は完全競争であり、これは自由競争の時代には独占がまだ社会的大量現象でなかったことに照応する。つまり現実からの理論の抽象として擬制として完全競争から出発し得た。が独占段階では競争が不完全となるから平均利潤は成立せず、完全競争の体系は崩壊する。このことにマ

ルクスは気附いていた。だからマルクスがプランの中に、「資本一般」の彼岸の領域に於て完全競争と云う古典経済学の範疇類型をのりこえるために、「競争論」以下を残したのである。

「資本一般」の体系 \parallel 完全競争の体系 \parallel 平均利潤の体系、現実的競争の論理 \parallel 不完全競争の体系 \parallel 最大限利潤の体系、この上に立って過剰生産の体制と貨幣を鍵として本来的独占価格・最大限利潤の法則を探索しようとするのが氏の見解の核心である。

氏はこの様な構想を詳細な学説史研究をもって展開するのであるが、かかる類型化の結果マルクスの現行「資本論」の体系が歪められて解されて了う。即ち弁証法・史的唯物論の視点が見失われ、又現実的競争 \parallel 不完全競争だとするところからマルクスが現行「資本論」において彼岸へと疎外した競争論の内容が、一部は「資本一般」に属するとされ一部は消え失せて了っている。

三

私には氏の類型化が余り意味を持たない様に思われる。何となれば上述した氏の類型化が幾つかの欠点を持っていると思われるからである。

レント概念の拡張—労働レント・資本レント—は独占段階の論理であると氏は云うが、レント夫自身はどうか。現行「資本論」に於て、マルクスは差額地代は農業に於て限界生産費が調節的市場価値となることから発生するとしている。限界原理が平均原理の体系たるべき「資本一般」に含まれているのを氏は少しも気にされていない様である。又氏は、現行「資本論」体系の論理のわくの中で出て来る競争—これは完全競争—が、(一)需要供給の運

動、(二)平均利潤(生産価格)および市場価値の形成運動、(三)生産力競争と云う三つの意味を含むとしている。そして(一)は需要供給が一致する瞬間での需要供給であると云われる。確に氏の云われる様にマルクスは現行「資本論」に於ては競争の行なつたところを問題にし、需要供給のヨリ深いところで適當でない分析を競争論の課題としているが、しかし「資本論」第三卷第一〇章では市場価値の形成に対する需要供給変動の影響が取り扱われている。又(二)の競争は完全競争であるとしているが、マルクスは生産価格の形成運動についてはただ「市場価値について述べた一切は、必要な限定を加えれば生産価格にも当てはまる」(Das Kapital, Bd. III, Besorgt v. M. E. I. Institut S. 178—9)と述べているに過ぎず、Grundrisseでは平均利潤率は、各種事業部門における価格の關係を通して表現されるとしている。(Grundrisse der Kritik

der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857—8, Dietz S. 339) 更に氏は彼岸に不完全競争とされたところから、マルクスが後の問題とした諸項を彼岸の領域での競争(競争論)へ入れず従って本著から放逐してしまつてゐる。例えば、需要供給の変動に依り生産価格を中心として変動する市場価格の運動(資本論第三卷第一〇章)、価値規定をキソとするが新しい要素が入つて来る価格規定(Grundrisse, S. 336)、市場獲得のための条件としての価格の低下、価格關係の發展(Ebd., S. 651)等である。氏は又普通の意味での独占は「資本一般」の論理のわくの中での独占であるとしている。そしてこれを説明して、「……マルクスが、価値以上又は以下での販売は剰余価値の再分配たるのみ(Das Kapital, Bd. III, Abs. 1, Kap. 2)と云う場合の独占であり、その独占利潤

の大小は「資本家相互間のたまじあい」(Ebd.)や「資本家の狡智と勤勉」(Ebd., Bd. III, Abs. V, Kap. 23)に依存すると説明しているような独占である」(三九七頁)と云う。しかし氏も引用されている(三七二頁)様に、マルクスは「資本論」第三卷第一〇章で普通の意味での独占を自然的又は人為的独占と名づけ、そして資本の可動性の五つの前提の一つとして自然的以外の凡ゆる独占の排除を挙げている。氏と反対に、マルクスは普通の意味での独占を彼岸へと疎外している。

此の様に氏は「資本一般」の論理体系に完全競争の体系であるとして、この規準を一律に適用する。しかも氏が現行「資本論」「資本一般」を論理構造自体から証明すると云われた(六頁)のはこう云うものに過ぎないのである。市場価値の形成に対する需要供給変動の影響、生産価格形成の運動、普通の意味での独占等、マルクスが現行「資本論」に於てふれ乍ら完全な分析を与えていない競争の内容を、又マルクスが競争論の内容としたものを、それらが総価値に総価格のわく内に在るから「資本一般」のわく内の問題だと宣言しただけでは、何人をも納得せしめ得ない。

この様な欠点を本著が呈する根本的欠陥はどこに在るか。それは氏が「資本一般」の論理に完全競争の論理に平均利潤の体系という定式化を、「資本論」内部から割り出してない点に在る様に思われる。定式化が単なる宣言でしかない。一体完全競争と云う言葉はどこから出て来たのか。氏が価値計算と価格計算の問題、生産価格を成立させる競争、について述べていることは極めて素朴なことであり、再生産表式の抽象性についての叙述もこれ又余りにも自明なことである。又諸家の論争的となつてゐる恐慌の

必然性について、氏は現行『資本論』は恐慌の必然性まで包含すると云われるが単なる宣言でしかない。又氏の云う本来的独占価格についても、「滞貨の本来的価値と商品の価値廃棄とに対応するだけの流通界に存在する貨幣が独占価格を支払うべく動員吸収される」となっているが、資本制生産に於ては価値の生産と実現が別箇の事柄であり、又生産力の増大が恒常的現象である以上、商品や資本の価値減少・廃棄は自由競争の段階でも必然的である。氏の所謂『鍵』は独占段階に特有な現象ではない。

四

この様に私には氏の本来的独占価格の論理的基礎づけが大して成功していない様に思われる。勿論氏の嘆かれる様にプランについて正しい認識を持たない「大たわけ」もいる以上、現行『資本論』＝『資本一般』従って完全競争の体系であり、現実的競争・本来的独占価格の対象領域は競争論以下だと強調されることは意義のあることだが、単なる宣言の域を脱するためにはもっと地味な努力が重ねられるべきである。「競争一般、ブルジョア経済のこの本質的な機関車は、ブルジョア経済の法則を創立するのでなくして、法則の執行官である」(Grundrisse, S. 450)以上執行官が執行する法則を先づ資本論の中で抽象から具体へという経済学的範疇の発展にしたがって把えること、マルクスの残した示唆と『資本論』の論理から執行する場を整えることなくして突り豊かな創造は期待できない。